

知的障害特別支援学校における主体的な社会参加を めざした「授業づくり」の方法についての提案

武藏 博文 ・ 惠羅 修吉 ・ 西田 智子 ・ 小方 朋子 ・ 坂井 聡
(特別支援教育) (特別支援教育) (特別支援教育) (特別支援教育) (特別支援教育)

山内 雅子* ・ 滝澤 健* ・ 榎並 浩* ・ 丸橋 順子* ・ 妹尾 恭子* ・ 吉川 順子*
(附属特別支援学校) (附属特別支援学校) (附属特別支援学校) (附属特別支援学校) (附属特別支援学校) (附属特別支援学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*762-0024 坂出市府中町綾坂889 香川大学教育学部附属特別支援学校

Suggestion about the Method of Designing Lessons which Aimed at Proactive Social Participation in the School for Special Needs Education

Hirofumi Musashi, Shukichi Era, Tomoko Nishida, Tomoko Ogata, Satoshi Sakai,
Masako Yamauchi, Ken Takizawa, Hiroshi Enami, Junko Maruhashi, Kyouko Seo
and Junko Yoshikawa

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Attached School for Special Needs Students in Kagawa University, 889 Ayasaka, Fuchu-cho, Sakaide 762-0024*

要 旨 知的障害特別支援学校において、児童生徒の授業への参加を高め、課題解決の力を育む授業づくりを行うことで、児童生徒の主体的な社会参加のための資質を向上できるかを検証する。授業づくりにおける研究の視点を「活動への目的意識」「学びを深めるための協同した学習」「習得した知識や技能の活用」と設定し、授業改善を行う中で、授業への参加を高めるための有効な支援環境について検討した。

キーワード 主体的社会参加 授業改善 支援環境 支援ツール 協同学習

I. はじめに

平成24年7月に、中央教育審議会初等中等教育分科会のもとに設置された「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」は「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」を取りまとめた。障害のある者が教育制度一般から排除されないこと、自己の生活する地域において初

等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供されること等が重要であるとしている。

そのために、障害のある子たちの自立と社会参加に向けて、その教育的ニーズに最も確に応える指導を提供できる、教育の場を整備することが重要となる。その最も本質的な点は、それぞれの子どもが、授業内容が分かり、学習活動に参加している実感・達成感をもちながら、

充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていくことである。

香川大学教育学部附属特別支援学校（以下、本校とする）では、平成22・23年度に、「子どもの主体的な社会参加をめざして－ポジティブな人間関係をはぐくむことを視点とした授業づくり－」を研究主題とした。児童生徒が集団の中で役割を担い、進んで相手と関わり合い、協同して活動することを、授業における「ポジティブな人間関係」と捉えた（香川大学教育学部附属特別支援学校、2012）。

これを進めて、平成24年度より、「子どもの主体的な社会参加をめざしてⅡ－参加を高め、知識・技能を活用する力を育む授業づくり－」を研究主題とした。児童生徒が目的意識を向上させ、学びを深め、活用する力を身に付けることをねらいとした（榎並・吉川・恵羅他、2013；丸橋・滝澤・前田他、2013；山内・妹尾・田中他、2013）。

本校の研究主題である「子どもの主体的な社会参加」とは、現在及び将来にわたって、必要な支援を受けながら、自らのもてる力を最大限に発揮し、自分の生活に関することを自己選択・自己決定しながら、地域社会で暮らすことを指している。「授業づくり」とは、主体的な社会参加の実現のため、学校の教育活動、特に授業の中で児童生徒の力を最大限に伸ばし、発揮できるようにすることである。そこで、児童生徒が必要なことをしっかり身に付けるように、一人一人の授業への参加を高めることを最優先に考える。

Ⅱ. 目的

児童生徒が分かって動ける（参加の高い）授業づくりをすることで、主体的な社会参加のための資質向上が図れるかを検証する。授業への参加の質を高めるために、第1に、活動への目的意識を向上させるための工夫、第2に、学びを深めるための協同した学習の工夫、第3に、学んだ知識や技能を活用する力を育むための工夫について、授業づくりの方法を検討する。

Ⅲ. 方法

1. 対象および全体計画

本校の小学部・中学部・高等部の各学部において、小学部では「ことば・かず」、中学部では国語科、数学科、高等部では保健体育科、「暮らし」、「ライフスキル」の授業を対象として授業研究を行った。

2012年6月、9月、2013年1月に研究授業を行うのに加え、2012年5月、10月に示範授業を行い、年間5回の授業研究と討議会を実施した。さらに、研究全体会、各部研究会、夏季研究集会、冬季研究集会、公開授業研究会を実施し、研究を進めた。

本研究では、授業改善事例として、小学部はことば・かず1グループ「動きの言葉～やってみようチャンネル～」、中学部は数学Bグループ「重さを測ろう」、高等部はライフスキルBグループ「ライフスキル～いろいろな動きをしよう！～」を取り上げる。

2. 授業づくりの視点

（1）活動機会の設定

本校では、集団の中で社会的な役割を担い、評価場面や選択決定の機会を設けることで、互いの存在を認め、認められる集団をつくることを大切にしてきた。そのことによって自尊感情が高まり、集団への帰属感や自己肯定感を抱くと考えた。そして、児童生徒同士でやり取りをしながら活動し、課題を解決していく姿の実現をめざしてきた。それが人間関係形成能力を育み、授業への参加を高めることにつながると考えた。

本研究では、前述を踏まえて、授業の中での学びを大切にし、それを実生活と結び付け、生活の中で活用していく力を育むことをねらいとした。生活の中での活用を念頭におくことが授業での学びをより深めることになると考えた。

- ①集団の中で社会的な役割を設定する。
- ②児童生徒同士のやり取りや、協同した活動を設定する。
- ③知識や技能を活用して、課題解決を図る活

動を設定する。

(2) 支援環境の工夫

設定した活動機会において、児童生徒の参加を高め、ねらいを達成していくために、支援環境を見直して工夫することが必須である。藤原(2010)、藤原・小林・阿部他(2012)は「分かって動ける授業づくり」として、児童生徒の自立的主体的な活動・参加を促進するための支援の在り方として以下の3点を挙げている。

- ①すべての児童生徒のために物理的支援環境を整える。
- ②個のニーズに応じた支援(支援ツール)を充足する。
- ③教師による適切な人的支援環境を見直す。

まず、授業環境全体に関わる配慮を見直すことである。例えば、活動全体の見通しやねらいをもちやすくすること、児童生徒が活動しやすいように動線を整理すること、教材等の物の配置や手掛かりの配置を工夫すること、指導者の位置を見直すことである。

次に、全体への配慮と合わせて、個々の児童生徒が分かって動けるための支援を見直すことである。例えば、活動を促す手掛かりや、扱いやすい自助具を準備し提供することである。児童生徒が自ら参照して活用できるように支援を続けることである。

そして、全体への配慮、個々の児童生徒への支援を十分に整えた上で、児童生徒の自立的な行動を促すために、効果的な教師の支援を検討する。例えば、児童生徒に活動の見通しをもたせるための支援、指導者の見本、言動を深める助言や発問、評価のポイントや基準を伝える工夫等である。

3. 「授業づくりのための手順及びポイント」と改善のサイクル

平成22・23年度研究において、教職員が同じ視点で授業づくりを行えるように、授業改善の際に重要であるポイントを整理し、「授業づくりのための手順及びポイント(試案)」を作成した。

本研究では、この「授業づくりのための手順

及びポイント(試案)」を基に、授業をチェックし授業改善を重ねることにした。授業研究において、どのような活動機会の設定や支援環境の工夫が行われたかを分析することで、さらなる有効な支援方法を見出し、「授業づくりの手順及びポイント(試案)」に修正を加えることにした。

授業改善は、PDCAのサイクルで行ってきた。授業の様子をビデオで撮影し、複数の教員で児童生徒の様子と支援環境を分析し、討議をしながら支援の見直しを行った。それを次の授業へと生かすようにした(図1)。

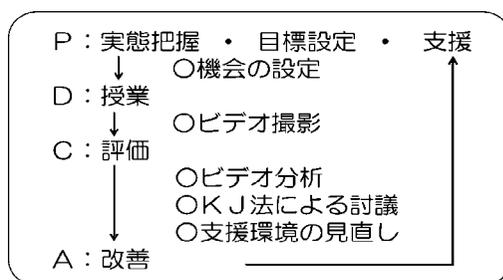


図1 授業改善のサイクル

IV. 授業改善事例：小学部 ことば・かず 1グループ「動きの言葉～やってみようチャンネル～」

1. 題材設定と授業づくりの視点

本題材では、既習の身近な物の名前に加えて、動きの言葉を取り上げた。動きを見て言葉や文字で表現することや、文の内容に合った動きをするなど、動きと言葉を結び付ける活動を繰り返し行うことができるように学習を設定した。

物の名前に加え、動きの言葉を習得することは、児童の理解できる語彙をさらに増やし、表現力を高め、コミュニケーション能力の向上につながる。そして、生活の幅を広げていくことが期待できると考えた。

表1 「動きの言葉」の学習指導過程

学習活動	
1	既習の学習内容を確認する
2	動きの言葉を知る ・動画をみて新出の言葉を知り、文字を見ながら発音する
3	文を作る「○○(名詞)を△△(動詞)」 ・動きの言葉を使い、写真に合った内容の文を作る
4	文を発表する「やってみようチャンネル」 ・言葉や具体物を使った動作で発表する ・友達や指導者の発表の正誤を評価する
5	個別課題をする ・個の実態に応じて、作った文を書いたり、見本合わせなどをしたりする

2. 目標及び計画

(1) 対象児童

小学部1年生3名(A女, B女, A男), 2年生3名(B男, C男, C女)の計6名であった。言葉の理解は, 生活の身近な言葉を聞き実行できる児童(A女, B女, B男)から, 絵や写真など視覚的な手掛かりが必要な児童(A男, C男, C女)までいる。言葉の表出は, どの児童も動きの言葉を用いて話すことは少ない。文字は, 平仮名を読み書きできる児童(A女)から, 読むのは難しいが視写ができる児童(A男, C男)まで実態は幅広い。

(2) 指導内容と目標

写真の内容に合った文を, 言葉カード(名詞, 動詞)を使って, 「たおるをたたむ」のような文を作る, 読む, 動作化する, 文を書くなどの活動を設定した。その上で, 友達や指導者に向けて, 作った文を, 言葉や具体物を使った動作で発表するようにした。さらに, 友達や指導者の発表(言葉や動作)を聞いて, その正誤を評価した。

- ・動きを表している写真を見て, 文字カードや単語カードを使って文を作ったり, 書いたりすることができる。
- ・文の内容に合った具体物を選んで動作化したり, 言葉で表現したりすることができる。

る。

- ・友達や指導者の動きに注目して, 正誤を伝えることができる。

(3) 学習指導計画

第1次: 動きの言葉を知ろう(10時間)

第2次: 動きの言葉をやってみよう(10時間)

(4) 学習指導過程

一時間の学習指導過程は表1のようである。

3. 授業改善

(1) 学習活動1: 既習の学習内容を確認する

1) 改善前の支援と児童の様子

動画を見て, 「何してる?」の問いに一齐に答える形で学習を行った。提示される動画や絵, 文を見て意欲的に答えるものの, 名詞で答えることが多く, 動きの言葉を十分に意識して取り組めていなかった。

2) 改善点

①活動機会の設定: 児童の日常生活の様子を動画で提示し, その中から動きの言葉(手を洗う, 帽子をかぶるなど)を探す活動を設けた。実生活に使われている言葉に焦点を当てることで, これから始まる学習が動きの言葉であることを意識できるようにした。

②環境的支援の見直し: 動画には動きの言葉のみのテロップ(「はく」「かぶる」など)を挿入することで, より動きの言葉を意識できるようにした(図2)。

(2) 学習活動3: 文を作る『○○を△△』

1) 改善前の支援と児童の様子

動きを表した写真を見て, 文を作ったり書いたりする活動では, 児童の手元にすでに見本が提示されていたり, 分からないときには指導者に尋ねたりすることが多かった。そのため, 自分で調べたり, 探したりして課題解決を図る活動機会が少なかった。

2) 改善点

①個に応じた支援ツールの見直し: 平仮名を読むことが難しい児童の中で, 多くのヒントから適切なものを選ぶことができる児童(A男, C男)に, 動きの言葉に絵を併記した「動きの言葉辞典」を用意し, 当てはまる言葉が



図2 日常生活の様子を撮った動画

分からないときには自分で調べて課題解決を図る学習機会を設けた(図3)。

②指導者による直接的な支援の見直し：児童が分からなくて援助を求めてきたときに「動きの言葉辞典」の存在を知らせ、使い方を教えるようにした。

(3) 学習活動4：文を発表する

1) 改善前の支援と児童の様子

テレビ画面に提示された絵と文を手掛かりとして、実物や模型を使い、作った文の動作化を行った。テレビ画面が発表する児童の背後にあり、発表する児童が手掛かりとして確認しにくかった。評価する児童から見て何を評価するのかが分かりにくかった。

2) 改善点

①活動機会の設定：発表する児童は、動作で発表する内容を意識できるように、他の児童や指導者に評価を求める前に、「帽子をかぶる」など自分の作った文を言葉や携帯情報端末で表現する活動を取り入れた。

②環境的支援の見直し：評価の手掛かりとして、テレビ画面の代わりに発表する児童の横に正解を示した作文ボードを置くことで、手掛かりが評価する児童から見えやすくなった。作文を読む場所、動作化をする場所を分け、児童がどこで何をすることを明確にすることで、児童が発表活動を自分で進められるようにした(図4)。



図3 「動きの言葉辞典」を用いている様子

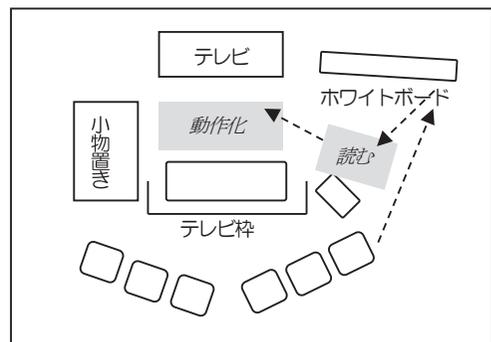


図4 改善後の配置と発表する児童の動き

4. 結果

(1) 指導目標の到達度

学習した言葉を用いて文を作ったり、動作化したり、動作を見て言葉で表現したりすることができるようになった。各児童の目標の達成度は、表2のようであった。

(2) 研究の3つの視点から見た児童の変容

活動への目的意識をもつための工夫として、学習活動1の最初に、動画から動きの言葉を探す活動を設けた。これから始まる学習内容を意識できるようになった。

学びを深めるための協同した学習の工夫として、学習活動3の発表活動で、児童同士で評価を行う場を設定した。友達の動作を言葉で表現したり、動作を結び付けて評価したりすることで、より言葉の習得を促すことができた。

習得した知識や技能を活用する力を育む工夫

表2 「動きの言葉」の各児童の指導目標の達成度

	A女	B女	A男	B男	C男	C女
	始終	始終	始終	始終	始終	始終
目標①	○◎	○◎	△◎	○◎	△◎	△○
目標②	◎◎	△◎	△○	○◎	△◎	×○
目標③	◎◎	△◎	○◎	○◎	△◎	△○

◎：一人で ○：手掛かりを示されて・友達から促されて
△：指導者の指示で（指さし，言語指示など） ×：できない

として，学習活動2の後の活動で，文を作る，読む，動作化する，書くなどの形を変えて繰り返し学ぶことができるように展開を工夫した。

「動きの言葉辞典」を用意して，自分で調べたり，探したりして課題解決を図る活動機会を設けた。自ら手掛かりを見つけて課題に取り組む姿が見られるようになった。

5. 考察

活動機会を見直し，支援環境を工夫することにより，言葉の習得を促すことができた。学習内容の形を変えて繰り返し取り組んだことで，児童の知識の習得をより促した。また，児童同士の相互評価を行う場面を設定したことは，身に付けた学習内容を活用する機会となり，さらに知識を深めることにつながった。

学んだ言葉や授業で使った支援ツールを日常生活の中で生かせるようにすることが課題である。そのためには，生活の中で学んだことを生かせる機会を作る必要がある。

V. 授業改善事例：中学部 数学 Bグループ「重さを測ろう」

1. 題材設定と授業づくりの視点

本題材では，重さに関する基礎的知識や技能を身に付けられるように，様々な物の重さを測定したり，物を使って提示された重さを測り取ったりする活動を設定した。

身近にある物を取り上げ，指導者からのミッションとして提示することで，目的意識をもって活動に取り組めるようにした。一人ではできない課題を設けて協力して作業するようにした

り，二人で手掛かりを共有しながら一緒に考えたりする場面を設定した。

さらに活用として，重さの見当を付けたり，見積りを考えたりして測定する場面を設定した。その支援として，重さを視覚的に捉えることのできる支援ツール「みつもりくん」を使ったり，既習事項を確認するために，携帯情報端末を利用したりした。

2. 目標及び計画

(1) 対象生徒

中学部1年生1名(A男)，2年生2名(F男，F女)，3年生1名(H女)の計4名であった。重さの軽重は理解し，順番を付けることができる。連続量(水や砂等)や同じ種類の物(クリップやくぎ等)を使って決められた重さを測り取ることにはできる。しかし，物を測り取る際，重さの見通しをもって，物の増減ができる生徒は1名である。重さの異なる複数の種類の物を使って決められた重さを作ることはどの生徒も難しい。

(2) 指導内容と目標

重さの見当付けをしてから実測することで，効率よく物を測り取る技術や量感を養うことができると考えた。重さの違う2～3種類の菓子をを使って，条件(全体の重さ，使う菓子の種類，使うおもりの数について)に合った重さを作る活動を設定した。まず個々で条件に合った見積もりを立て，その後，ペアで互いの考えを説明し合い，さらに，他のペアに発表することとした。

- ・重さに見当を付け，条件に合った菓子を正しく選ぶことができる。
- ・既習事項を使って，主体的に重さの見積もりを立てることができる。

(3) 学習指導計画

第1次：重さを比べる（2時間）

第2次：物の重さを測る（6時間）

第3次：提示された重さを測り取る（8時間）

(4) 学習指導過程

一時間の学習指導過程は表3のようである。

表3 「重さを測ろう」の学習指導過程

学習活動	
1	前時までの振り返りをする
2	今日の課題を知る
3	重さの見積もりをする
3-1	一人で見積もりを考える
3-2	ペアで見積もりを確認する
3-3	立てた見積もりを発表する
4	まとめをする
4-1	お菓子で重さを作る
4-2	振り返りをする

3. 授業改善

(1) 学習活動2；今日の課題を知る

1) 改善前の支援と生徒の様子

電子黒板に提示された課題をワークシートに記入してから、課題を行うようにしていたが、説明を聞くときに集中できずに、必要な内容をワークシートに書き忘れたまま始めることがあった。また、課題を確認するには、ファイルにとじたワークシートを見る必要があり、支援ツール「みつもりくん」の操作やファイルを参照することなど、生徒の動きが煩雑になっていた。

2) 改善点

①活動機会の設定：ペアの友達と共通した課題意識をもって取り組めるように、ペアで1台の携帯情報端末を使うことにした。

②環境的支援の見直し：取り組む意欲が高まるように、課題提示の仕方を、写真と指導者の説明から、「○○先生からのミッション」の動画に変更した。課題を意識して学習に取り組むことができるように自作した支援ツール「みつもりくん」に課題を記入する欄を作った。動画による課題提示を見たすぐ後に、課題を記入する活動を毎時間繰り返し行った。

③個に応じた支援ツールの見直し：課題提示の動画「○○先生からのミッション」を携帯情報端末に入れておき、必要に応じていつでも手元で課題を確認できるようにした(図5)。

(2) 学習活動3；重さの見積もりをする



図5 「先生からのミッション」課題を入れた携帯情報端末

1) 改善前の支援と生徒の様子

測り取る重さを指定されたときに、同じ重さの物を増減することはできたが、重さが違う物を組み合わせるときは増減の関係が分かりにくく、計量に時間がかかっていた。重さの見当を付けずに、測る物をランダムに取って、課題とする重さを作っていたため効率が悪かった。

2) 改善点

①活動機会の設定：自分の見積りの仕方を説明したり、友達のやり方との違いに気が付いたりできるように、自分の見積もりを立てた「みつもりくん」をペアの友達と交換して、互いに確認し説明し合う場面を設定した。

②環境的支援の見直し：提示された重さと個数の関係を分かりやすく示し、効率的な測り方について考えることができるように「みつもりくん」で重さの見積りをしてから実測するようにした。また、徐々に重さが増えていき、指定された重さになっていくことが理解できるように、最初に0の数値を入れ、課題となる重さも表示するようにした(図6)。

③個に応じた支援ツールの見直し：重さが足りないときや超えたときに「みつもりくん」の「こま」をどのように操作するのか、どの「こま」から動かしていけばよいのかなど、すでに学習した事項を動画で携帯情報端末に入れておき、必要に応じていつでも手元で確認しながら見積りができるようにした(図7)。

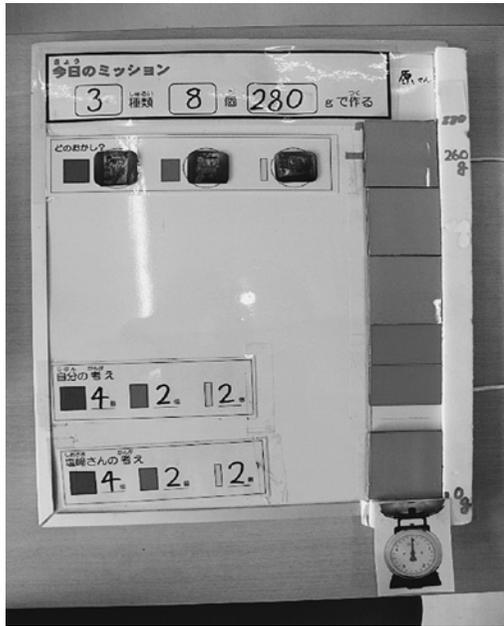


図6 自作の支援ツール「みつもりくん」



図7 「こま」の動かし方の動画を入れた携帯情報端末

「みつもりくん」を操作するとき、重さの量感を意識できるように、「みつもりくん」の「こま」に実際の重さを持たせた物を使用した(図8)。

4. 結果

(1) 指導目標の到達度

各生徒の目標の達成度は、表4のようであった。

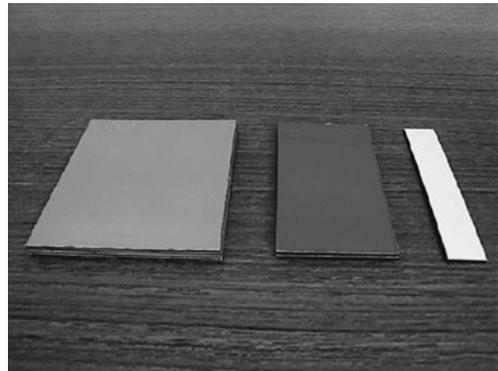


図8 みつもりくんのこまの使用例

上；大きさと厚さの違いで重さを表したこま
下；重さをもたせたこま

表4 「重さを測ろう」の各生徒の指導目標の達成度

	A男		F男		F女		H女	
	始	終	始	終	始	終	始	終
目標①	△	○	△	○	×	○	×	○
目標②	△	○	△	○	×	○	△	○

○：1人で △：指導者の支援で ×：できない

(2) 研究の3つの視点から見た生徒の変容

活動への目的意識の向上のための工夫をした結果、動画を確認しながら学習課題を確実に聞きとり、ボードにメモをすることができるようになった。活動への取り掛かりが素早く、自発的になった。

学びを深めるための協同した学習の工夫をした結果、ボードを見ながら、自分の分担を確実にやり、相手が迷っていると声を掛けながら協力して活動できた。自分とは違った見積もり方

を知り、様々な考え方があることに気付いた。

知識や技能を活用する力を育むための工夫の結果、重さを視覚的に表した「こま」を操作することで、量感や重さの増減へのイメージをもつことができた。

5. 考察

結果から、研究の3つの視点における支援環境の工夫を行うことで、生徒の授業への参加を高めることができた。さらに、課題解決への意欲や主体的な取り組みを高め、課題解決に必要なコミュニケーションの力や認め合う態度も育てることができたと考える。授業で学んだ量感や見積もりの仕方等、生活の中で必要となる数学的な知識・技能に加え、これらの力は社会参加に必要となるものであり、このことから、3つの視点における工夫は、主体的な社会参加へとつながっていくものと考えられる。

VI. 授業改善事例：高等部 ライフスキル Bグループ「ライフスキル～いろいろな動きをしよう！～」

1. 題材設定と授業づくりの視点

ライフスキルは、「個別の共働支援計画」の生活や余暇に関する目標を達成するため、卒業後の生活スキルの向上や余暇の充実をめざす各教科等を合わせた指導である。活動の流れを一定にすることにより、生徒が見通しをもち、個々のペースで自主的に活動する。

集団学習では、様々な動きを取り入れた運動に取り組むことで生活や仕事に必要な体力の保持増進や運動の習慣化を図ることをねらいとした。個別学習では、一人で実施でき、気分転換として活用可能な活動を自ら選択できることをねらいとした。

2. 目標及び計画

(1) 対象生徒

Bグループは、高等部1年生5名、2年生5名、3年生5名で構成されている。自分のしたいことを考えて選択できる者から、簡単な指示

に従って行動ができる者、活動全体に支援が必要な者など実態の差は大きい。

(2) 指導内容と目標

集団学習として、体育館で音楽を取り入れて、体幹を鍛えたり、ボディイメージやバランス感覚を養ったりする8種類の運動に取り組んだ。その際、その日に重点的に取り組む運動を自分で決めるようにした。動きに対する評価を行うことで、自分の得手不得手を知り、運動に対するさらなる意欲の向上を図ることができ、さらに、活動に必要な役割を生徒に任せることで自主性を育てることができると考えた。

個別学習として、教室でパズルやゲーム等の興味ある活動を選択し、時間になるまで取り組んだ。一定の時間を有意義に一人で過ごせる態度を養うとともに、課題を自己決定する力を身に付けることができると考えた。

- ・個別の重点運動種目を意識して、運動に取り組む。
- ・自分の役割分担を確認し、準備や片付けをする。
- ・自分が興味・関心のある活動を選んで指導者に伝え、時間いっぱい取り組む。

(3) 学習指導計画

学習指導計画は表5のようである。

(4) 学習指導過程

一時間の学習指導過程は表6のようである。

3. 授業改善

(1) 学習活動1-2：運動をする

1) 改善前の支援と生徒の様子

動きの説明を録音したCDをかけていたが、聴覚的な働き掛けのため、具体的なイメージをもてないまま指示された動きをしていた。指導者は、指示された動きに取り組むことが難しい生徒への支援に掛かることが多く、生徒に見本を見せたり、その動きをチェックしたりすることが十分にできなかった。

2) 改善点

- ①個に応じた支援ツールの見直し：指導者が各運動の種目に取り組んでいる様子を撮ったビデオをステージ上のスクリーンに映し、動

表5 「ライフスキル」の学習指導計画

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
個別学習（朝の支度）											
集団学習（みんなで走ろう）						集団学習（いろいろな動きをしよう）					
個別学習（個別の課題）											

表6 「ライフスキル」の学習指導過程

学習活動	
0	各自で朝の支度をする
1	集団学習をする（体育館）
1-1	準備をする
1-2	運動をする
1-3	チェックカードに記入する
1-4	次時の個別の重点運動種目を選ぶ
1-5	片付けをする
2	個別学習をする（各教室）
2-1	チェックシートに記入する
2-2	自分で選んだ活動をする
2-3	片付けをする

きを参考にできるようにした（図9）。

②指導者による直接的な支援の見直し：指導者が見本を示さなくてもよくなったことで、生徒の動きを定位置で観察し、うまく動くことができている生徒に支援するようにした。

（2）学習活動1-3；チェックカードに記入する

1) 改善前の支援と生徒の様子

全員が同じチェックカードを使っており、走った周回数をチェックカードに記録してシールを貼るだけであった。一カ所にチェックカードを置いていたので、一度にチェックできる生徒の数が限られており、待ち時間が長くなることが多かった。

2) 改善点

①活動機会の設定：自分で評価できる生徒は自己評価をし、自分で評価することが難しい生徒は指導者が評価したものを確認することで、振り返ることができるようにした。評価を参考にして、次回に重点的に取り組む運動種目を選ぶようにした。



図9 ステージ上のスクリーンを参考にしている生徒の様子



図10 チェックカードをチェックしている様子

②環境的支援の見直し：チェックカードはステージ上に並べておくことで、順番を待たずに自分のカードを取ることができるようにした（図10）。

③個に応じた支援ツールの見直し：運動種目番号と評価を書き込んだり、運動種目の写真シールと評価を貼り付けたりすることができるチェックカードを用意した。

生徒の実態により、運動種目の一覧からその日に取り組んだ種目をチェックするカードと、その日に取り組んだ運動種目のシールを1種目ずつ貼り付けるカードを用意した。

（3）学習活動2-1；チェックシートに記入をする

□月 □日			
1	きがえ		
2	しゅうのう		
3	うんどう		
4	てあらい		
5	うがい		
6	じぶんのじかん ()	 	

図11 個別学習でのチェックシートの例

1) 改善前の支援と生徒の様子

個別学習で、自分で取り組んだ活動を自己決定・自己選択したことについて記述する場面がなかった。活動を指導者が指示することがあり、生徒は受け身になることがあった。

2) 改善点

①活動機会の設定：卒業後の生活を考え、自分で選択した活動に取り組むようにした。

②個に応じた支援ツールの見直し：自分がしたい活動を明確にするために、選択した活動を記入したり、選択したもののシールを貼ったりする欄をチェックシートに設けた(図11)。

③指導者による直接的な支援の見直し：自分で活動を選択できる生徒に対しては、自分から支援を求めてくるとき以外、指導者は基本的には指示を出さず見守るようにした。

4. 結果

(1) 指導目標の到達度

スクリーン上に映される動きの見本を参考にして動くことができてきた。苦手な運動種目についても、動きを意識して取り組む様子が見られるようになった。写真の入ったチェックカードを用意することで、運動種目を自分で確認しながらできるようになった。

個別学習においては、自主的に自分がやりたい活動に取り組むようになった。

(2) 研究の3つの視点から見た生徒の変容

活動への目的意識をもつための工夫として、運動種目番号と評価を書き込めるチェックカードを用意することで、評価の時に自分が取り組んだ運動を振り返ることができるようになった。運動種目の写真を入れた種目選択のボードを用意することで、指導者からの評価を確認し、次回に取り組む重点運動種目を自分で考えて決めることができるようになった。

学びを深めるための協同した学習の工夫として、集団学習後に、その日の運動の評価を発表する場を設定することで、次時への意欲につながったり、他人を意識できたりするようになった。

知識や技能を活用する力を育む工夫として、ある一定期間役割や活動の流れを固定することで、自分の役割を確認し、自主的に準備や片付けをすることができるようになった。

5. 考察

自分たちで必要な役割を考えて係分担することが難しい生徒は、指導者が役割を決めておくことを通して、自主的に取り組む姿が見られるようになった。また、ビデオを使って動きを映写することで、必要なときに動きを参考にできるようになった。これらのことから活動への参加が高まったと考えられる。さらに、集団学習、個別学習それぞれにおいてチェックカードやチェックシートを使うことで、自己選択・自己決定する機会が増え、生徒の主体的な参加が高まったと考えられる。

VII. 成果と課題

平成22・23年度の研究より引き続き、授業づくりに取り組むことで、授業や学校生活の中で分かって動ける児童生徒の姿が多く見られるようになってきた。また、そのための有効な支援方法が整理されてきた。

授業実践から得られた有効な支援方法を分析し、その結果を生かして作成した「授業づくりについての手順及びポイント(試案)」についても改訂を進めつつある。特別支援教育の視点

から、児童生徒が分かって動けるための、誰もが取り組める授業改善ができるように工夫をしてきた。

授業づくりの手順やポイントをはっきりさせることで、全教職員が同じ視点をもって授業づくり・改善に臨むことができた。このように取り組むことで、授業の質が向上すると考えられる。今後は、さらに分かりやすく手軽に使える、効果のある表に改訂しながら、授業づくりの過程の中でどのように使っていくのかを検討していきたい。

付記

本研究は、香川大学教育学部・附属学校園共同研究機構が行う2012年度の学部教員と附属学校園教員による共同研究プロジェクトの一環として実施した。

引用・参考文献

- 榎並浩・吉川順子・恵羅修吉・小方朋子（2013）主体的な社会参加をめざした授業づくり③参加を高め、知識・技能を活用する力を育むことを視点として－知的障害特別支援学校高等部「ライフスキル」の授業実践を通して－。日本特殊教育学会第51回大会発表。
- 藤原義博（2010）子どもが分かって動ける授業づくり－個のニーズに応じた包括的支援－。実践障害児教育，2010，7，34－35。
- 藤原義博（監修著）・小林真・阿部美穂子・村中智彦（編著）・富山大学人間発達科学部附属特別支援学校（2012）特別支援教育における授業づくりのコツ－これならみんな分かって動ける。学苑社。
- 香川大学教育学部附属特別支援学校（2012）第16回研究紀要 子どもの主体的な社会参加をめざして（平成22・23年度）。
- 丸橋順子・滝澤健・前田美帆・武藏博文・西田智子（2013）主体的な社会参加をめざした授業づくり①参加を高め、知識・技能を活用する力を育むことを視点として－知的障害特別支援学校小学部「ことば・かず」の授業実践を通して－。日本特殊教育学会第51回大会発表。
- 山内雅子・妹尾恭子・田中伸弥・坂井聡（2013）主

体的な社会参加をめざした授業づくり②参加を高め、知識・技能を活用する力を育むことを視点として－知的障害特別支援学校中学部「数学」の授業実践を通して－。日本特殊教育学会第51回大会発表。